

*pour the glass in vs. das Glas eingießen

—— 不変化詞動詞の対照研究(2) ——¹

大 矢 俊 明

1.

英語やドイツ語における不変化詞動詞 (particle verb) においては、不変化詞に対応する前置詞の目的語が脱落していると分析されることが多い。例えば (1) の不変化詞動詞 put on や auflegen ‘put on’ においては、それぞれの不変化詞に対応する前置詞 on と auf ‘on’ の意味上の目的語、すなわち「CD が置かれる場所=プレイヤー」が慣習的に固定されることにより統語的に具現しない。(2) に示すように、前置詞の意味上の主語は Figure (もしくは Trajector), また意味上の目的語は Ground (もしくは Landmark) と呼ばれることがあるが、多くの不変化詞動詞は Ground の抑制により形成されているわけである。一般に、意味的に顕著 (salient) な実体が Figure として選択されるのであるから、不変化詞動詞において Ground が抑制されることは意味的にも裏付けられることである。

- (1) a. He put the CD on.
 b. Er legte die CD auf.
 He put the CD on
- (2) the CD on the player
 [Figure] [Ground]

ところが、ドイツ語の (3a) における das Glas ‘the glass’ は動詞 gießen ‘pour’ の目的語ではなく、不変化詞 ein ‘in’ の意味上の主語でもない。(3a) は「彼は (飲み物を) コップに注いだ」という意味であり、直接目的語 das Glas ‘the glass’ はむしろ不変化詞 ein ‘in’ の意味上の目的語に相当する。すると (3a) の das Glas ‘the glass’ は、(3b) に示すように、不変化詞 ein ‘in’ に対応する前置詞 in の目的語の位置から動詞の目的語の位置に移動

(promote) しているように見えることになる。

- (3) a. Er goß das Glas ein.
 He poured the glass in
 b. Er goß das Glas_i in t_i.
 ↑
 c. *He poured the glass in.

本稿では、この現象を McIntyre (2007) にならい Ground Promotion (以下、GP と省略する) と呼ぶことにするが、以下、2 節では GP と同様に前置詞の目的語が動詞の直接目的語に交替する場所格交替 (Locative Alternation; 以下 LA と省略する) と比較しながら、ドイツ語の ein ‘in’ と auf ‘on’ を持つ不変化詞動詞にみられる GP の実現条件を検討する。3 節では、ドイツ語の (3a) に対応する英語の文 (3c) は許容されないことから、GP に関するドイツ語と英語の相違を論じる。続く 4 節では GP の派生を議論し、最後の 5 節では本稿の議論をまとめる。

2.

本節では、GP と同様に前置詞の目的語が動詞の直接目的語となる LA をみながら、ドイツ語の ein ‘in’ と auf ‘on’ を持つ不変化詞動詞にみられる GP の実現条件、ならびに GP と LA の相違を考察する。

- (4) a. Er lädt das Heu auf den Wagen.
 He loads the hay onto the car
 b. Er belädt den Wagen mit Heu.
 He BE-loads the car with hay

ドイツ語の LA では、(4b) のように前置詞の目的語、ないしいわゆる goal が動詞の目的語となる場合には接頭辞 be- が付加されるのが普通である (以下、このタイプの文を BE-S と呼ぶことにする)。ただし、方向の意味を持つ前置詞句を選択するすべての動詞が LA を示すわけではなく、例えば stellen ‘put’ や schieben ‘push’ は (5a) (6a) のように方向の前置詞句を選択するにもかか

わらず, BE-S は許されない。

- (5) a. Er stellt die Bücher auf den Tisch.
He puts the books on the desk
b. *Er bestellt den Tisch mit Büchern.
He BE-puts the desk with books
- (6) a. Michael schob den Wagen zur Schule.
Michael pushed the car to-the school
b. *Michael beschob die Schule mit dem Wagen.
Michael BE-pushed the school with the car (Rapp 1997: 516)

Dowty (1991) や Rapp (1997) によれば, 位置変化動詞が LA を示すためにはその直接目的語はいわゆる漸増の対象 (incremental theme) でなければならない。LA を示す位置変化動詞から (7a) のような「彼は水を瓶に注いでいるところだった」という文を作成してみると, この文は「水の一部は瓶に入っていた」ことを含意する。この点から füllen ‘fill’ や gießen ‘pour’ の目的語は漸増の対象であることが確かめられる。これに対して LA を示さない位置変化動詞である schieben ‘push’, fahren ‘drive’, rollen ‘role’ から (7b) のような「彼は車をミュンヘンまで押している・運転している・転がしているところだった」という文を作成しても, この文は「車の一部はすでにミュンヘンにあった」ことを含意しない。つまり, これらの動詞における直接目的語は漸増の対象ではない。

- (7) a. Er war dabei, das Wasser in die Flasche zu füllen/gießen, als...
→ Ein Teil des Wassers befand sich in der Flasche. (Rapp 1997: 512)
b. Er war dabei, den Wagen nach München zu schieben/fahren/rollen, als...
→ *Ein Teil des Wagens war bereits in München. (Rapp 1997: 513)

また Brinkmann (1997: 110ff.) は, (4a) の対格目的語である移動の対象 (theme) が (4b) のように前置詞 mit ‘with’ の目的語に「降格」されるためには, すなわち統語的な重要性を失うためには, その対象が定性を失い, 量化的 (quantificational) にも重要性を失う必要があると指摘する。そしてこの条件を満たすのは laden ‘load’, gießen ‘pour’ などの漸増の対象を目的語

に持つ動詞に限定されるという。Brinkmann は LA に関するこの条件を「非個別化の仮説」(The Nonindividuation Hypothesis) と呼んでいる。

(8) The Nonindividuation Hypothesis:

The direct object of a transitive locative verb may be omitted only when the quantificational properties of the corresponding argument are irrelevant; the argument may then be existentially bound.

(Brinkmann 1997: 113)

この仮説の論拠となるのは、例えば(9a, b)のペアや(9c)にみられる相違である。

(9) a. He jammed a pencil into the jar.

b. ?He jammed the jar with a pencil. (Brinkmann 1997: 104)

c. Man belud den Wagen gerade *mit der Statue/mit den Statuen/mit
Man BE-loaded the car just-now with the statue/with the statues/with
Statuen/mit dem Heu/mit Heu, als ...

statues/with the hay/with hay, when ... (Rapp 1997: 516)

対象が with ないし mit ‘with’ により具現される場合、(9b) (9c)のように可算名詞である対象が不定冠詞や定冠詞により限定されていると不自然であり、(9c)の Heu ‘hay’ ならびに(10a)の hay のように質量名詞 (mass noun) もしくは(9c)の Statuen ‘statues’ や(10b)の Sterne ‘stars’ のように複数名詞である必要がある。

(10) a. He loaded the wagon with hay.

b. Peter behängte den Christbaum mit Sternen.

Peter BE-hung the Christmas-tree with stars

Brinkmann の「対象が直接目的語から降格されるためには、その対象は漸増的性質を持つ質量名詞もしくは複数名詞である必要がある」という主張はドイツ語における GP にも適用できるように思われる。まず、この点を McIntyre (2001a) などであげられている不変化詞 ein ‘in’ および auf ‘on’ を持つ

GP の例をみながら確認しよう。

- (11) a. das Glas einschenken/eingießen
the glass in-pour/in-pour
b. das Leder einsprühen
the leather in-spray
c. Sie schmierte meinen Rücken mit Sonnencreme ein.
She smeared my back with sun-cream in
d. jemandem den Rücken einreiben
somebody-DAT the back-ACC in-rub
e. Wäsche einsprenken
laundry in-sprinkle
f. den Wagen mit Heu/Kisten aufladen
the car with hay/boxes on-load
g. den Tee aufbrühen/aufgießen
the tea on-brew/on-pour

(11a)は「コップに液体を注ぐ」、(11b)は「革製品にスプレーを吹き付ける」、(11c)は「彼女は私の背中に日焼け止めクリームを塗った」、(11d)は「誰かの背中に(クリームを)摺りこむ」、(11e)は「(アイロンをかける前に)洗濯物にスプレーする」、(11f)は「車に干草・箱を積む」、(11g)は「茶葉の上にお湯を注ぐ」という意味であるが、これらの例において直接目的語は goal を表示しており、また前置詞 mit 'with' により実現しているか否かにかかわらず、その goal に移動する対象は漸増的性質を持つ「液体」や「クリーム」などの質量名詞もしくは複数名詞の「箱」である。このことから ein 'in' および auf 'on' を持つ不変化詞動詞にみられる GP に関する次の結論が得られるであろう。

- (12) GP においても、BE-S と同様、goal に移動する対象は漸増的性質を持つ質量名詞もしくは複数名詞である。

この点は、次の例から裏付けることができる。

- (13) a. Er war dabei, den Wagen mit Kisten aufzuladen, als...
 → Ein Teil der Kisten befand sich auf dem Wagen.
 b. den Wagen mit Kisten/*einer Kiste aufladen
 the car with boxes/a box on-load

(13a)の「彼はその時、車に箱を積んでいるところだった」という文は「箱の一部は車に載っていた」ことを含意するため、goalに移動する対象 Kisten 'boxes' は漸増的の性質を持つことになる。また(13b)は、車に積む対象が裸複数である場合は許容されるが、不定冠詞を持つ場合は許されないことを示している。GPにおいても、BE-Sの場合と同様に位置変化動詞の直接目的語が「降格」されると考えられるため、GPとBE-Sには同様の制約が課せられるわけである。しかし、両者には異なる制約も認められる。Brinkmann (1997: 80f.)によれば、原則的にBE-Sは対象がgoalの外側 (exterior) へ移動する場合に限って認められ、対象がgoalの内部 (interior) に移動する場合には許されない。例えば、(14b)の「リュックサック」や(15b)の「トランク」のようなgoalを持つ文はLAを示さない。

- (14) a. Sie stopfte ihre Hosen in den Rucksack.
 She stuffed her trousers into the backpack
 b. *Sie bestopfte ihren Rucksack mit ihren Hosen.
 She BE-stuffed her backpack with her trousers
 (15) a. Er quetschte seine Wäsche in den Koffer.
 He crammed his laundry into the suitcase
 b. *Er bequetschte den Koffer mit seiner Wäsche.
 He BE-crammed the suitcase with his laundry

(Brinkmann 1997: 80)

これに対してGPは、(11a)の「コップ」のようにgoalが「容器」である場合も可能である。また逆に、BE-Sが可能であるすべての移動動詞においてGPが可能というわけではない。

- (16) a. Er schmiert die Schulaufgaben ins Heft.
 He scribbles the homework-PL into-the notebook

- b. Er beschmiert das Heft mit den Schulaufgaben.
He BE-scribbles the notebook with the homework-PL
- c. *Er schmiert das Heft mit den Schulaufgaben ein.
He scribbles the notebook with the homework-PL in
- (17) a. Er klebt Fotos ins Album.
He sticks photos in-the album
- b. Er beklebt das Album mit Fotos.
He BE-sticks the album with photos
- c. *Er klebt das Album mit Fotos ein.
He sticks the album with photos in
- (18) a. Er schreibt seine Namen auf den Zettel.
He writes his names onto the paper
- b. Er beschreibt den Zettel mit seinen Namen.
he BE-writes the paper with his names
- c. *Er schreibt den Zettel mit seinen Namen auf.
He writes the paper with his names on
- (19) a. Er hängt die Wäsche auf die Leine.
He hangs the laundry onto the rope
- b. Er behängt die Leine mit der Wäsche.
He BE-hangs the rope with the laundry
- c. *Er hängt die Leine mit der Wäsche auf.
He hangs the rope with the laundry on

(16c) (17c)は(11a-e)と同様に不変化詞 ein ‘in’ を持つ動詞を, また(18c) (19c)は(11f, g)と同様に不変化詞 auf ‘on’ を持つ動詞を含むが, それぞれ GP は許されない。ちなみに(16b) (17b) (18b) (19b)にみるように, これらの動詞は BE-S を許すのであるから, GP は LA と同様に対象の降格に関する(12)の制約に従いつつ, その成立には別の条件が課せられることになる。この点を次のペアをもとに考察しよう。

- (20) a. Er gießt das Glas ein.
He pours the glass in
- b. *Er klebt das Album mit Fotos ein. (= 17c)

- He sticks the album with photos in
 (21) a. Er lädt den Wagen mit Kisten auf.
 He loads the car with boxes on
 b. *Er schreibt den Zettel mit seinen Namen auf. (= 18c)
 He writes the paper with his names on

ein 'in' が用いられている (20a, b) と auf 'on' が用いられている (21a, b) とを比較すると、容認される (20a) (21a) では直接目的語が 3 次元の実体を表示していることに気付く。(20b) の直接目的語は「アルバム」であるのに対して、(20a) の直接目的語は「コップ」であり、ここではこの 3 次元の実体に液体が漸増的に注がれる状況が表示されている。同様に (21b) の直接目的語は「紙片」であるのに対して、(21a) の直接目的語は「車」であり、ここではこの 3 次元の実体に「箱」が漸増的に積み上げられている状況が表示されている。このことから、ein 'in' および auf 'on' を持つ不変化動詞の GP においては、次のような意味的制約が課せられることがわかる。

- (22) goal は 3 次元の実体である「容器」でなければならない。²

この制約から、さらに次の対立を扱うことができる。

- (23) a. *Er schmiert das Brot mit Butter auf.
 He spreads the bread with butter on
 b. Er schmiert das Brot mit Butter ein.
 He spreads the bread with butter in

(23a) では、auf 'on' を持つ不変化動詞において GP が生じているが、ここではパンの「表面」にのみバターを塗るという出来事があらわされているために容認されない。これに対して ein 'in' を持つ不変化動詞において GP が生じている (23b) では、パンが立体的・3 次元の対象として表現され、パンにバターを「塗り込む」という出来事があらわされているために可能になる。

次に考察すべきは、もちろんなぜ (22) の制約が存在するのかという点であるが、この問題を扱う前に次節でまず英語の GP について考察し、さらにドイツ語と英語における GP の相違について議論する。

3.

英語においてはドイツ語よりも GP が観察されにくく、英語の GP を扱った文献は少ないように思われるが、Levin & Sells (to appear) は次のような例を議論している。

- (24) a. She wiped the table off.
 b. He rinsed the cloth out.
- (25) a. He packed the clothes in (the suitcase).
 b. *He packed the suitcase in.
- (26) a. He smeared the ointment on (his hands).
 b. *He smeared his hands on.

(24)にみるように、英語においては off と out を持つ不変化詞動詞には GP がみられるが、(25b) (26b)にみるように in および on を持つ不変化詞動詞は GP を許さない。Levin & Sells (to appear) は、この点を結果構文に課せられる「スケール」の要請から説明する。Wechsler (2005) は、目的語が動詞に選択されている結果構文（彼の用語では「コントロール結果構文」）では閉鎖スケール (closed scale) を持つ形容詞が用いられなければならないと指摘する。閉鎖スケールとは、概略、文脈に依存しない極限值を持つスケールのことであり、例えば形容詞 full は「満ち」に関するスケールの極限值をあらわし、この極限值は物理的に決定される。これに対して、形容詞 tall や long の場合、絶対的な基準はなく、これらの形容詞を用いる場合に適用される基準は文脈に依存する。Wechsler (2005) によれば、(27a)の結果構文において long を用いることができないのは、この形容詞が閉鎖スケールを内在しないからである。

- (27) a. hammer the metal flat / *long
 b. wipe the shelf clean / *dirty

また、(27b)の dirty についてであるが、論理的にはほんのわずかな量の汚れ (a minimal amount of dirty) が存在すればこの形容詞を用いることができるはずである。つまり、dirty は本来的には文脈に依存しない閉鎖スケールを持つ形容詞であると考えられるが、Wechsler (2005: 263) は dirty や wet と

(28) a. Er goß das Glas ein. (= 3a)
 He poured the glass in
 b. Er lud den Wagen auf.
 He loaded the car on

(29) a. She wiped the table off. (=24a)
b. She wiped the table.

- (30) a. *He smeared his hands on. (= 26b)
b. He smeared his hands (with the ointment).
c. He smeared the ointment on his hands. (= 26a)

さらに(31)のように、動詞に選択されない目的語が GP の目的語として生起することがあるが、この事実は Levin & Sells の分析から予測できない。

- (31) a. pour the bucket out *pour the bucket (McIntyre 2003: 119)
b. pump the cellar out *pump the cellar
c. fish the lake out *fish the lake

結局、目的語が動詞に選択されている結果構文と GP を並行的に扱い、さらに in や on を持つ不変化詞動詞において GP が許されないことをスケールの種類に基づいて説明することは妥当性に乏しいことになる。では、(32)に見られるドイツ語と英語の相違は何に由来するのであろうか。

- (32) a. Er goß das Glas ein. (= 3 a)
He poured the glass in
b. *He poured the glass in. (= 3 c)

ここでは次の対立に着目しよう。

- (33) a. I was in the kitchen, pouring out drinks.
b. *I was in the kitchen, pouring in drinks.
c. I was in the kitchen and found a glass. Then I poured the beer in.
(34) Als ich in die Küche ging, goß ich Bier ein.
When I in the kitchen went, poured I beer in
'When I went in the kitchen, I poured beer into the glass.'

英語の不変化詞動詞 pour out の場合、液体がどこから注がれるか、すなわち out の意味上の目的語が文脈に明示されていなくても構わないが、pour in の場合は(33c)のように in の意味上の目的語が文脈から明らかになっていなければならない。これに対してドイツ語の不変化詞動詞 eingießen 'pour in' に

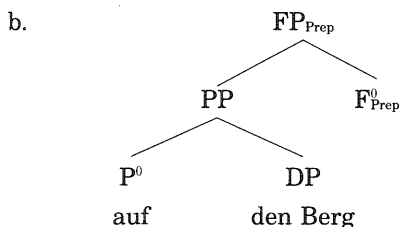
はそのような制約は存在しない。ドイツ語では in の意味上の目的語が明らかである場合、不変化詞 ein ‘in’ に直示的意味を持つ hin を付加することになる。

- (35) Er goß Bier hinein.
He poured beer HIN-in

Zeller (2001) は van Riemsdijk (1990) などに依拠し、前置詞句 (36a) に機能範疇 F^0 を持つ (36b) の構造を想定しているが、Zeller (2001) によれば、(35) の hin は (36b) における F^0 の語彙的な実現である。この分析によれば、直示的な意味を持つ hinein は前置詞句と同様の統語構造を持つこととなる。

- (36) a. auf den Berg

onto the mountain-ACC



McIntyre (2001a) が指摘しているように、hin や her を含む不変化詞動詞では GP は決して見られない。hin や her は前置詞句と同様の統語構造を持つので、前置詞句と同様にその意味上の目的語をその構造に含んでいると考えられるからである。

- (37) a. *Er lud den Wagen hinein.
He loaded the car HIN-in
b. Die Röhre strömt aus/*heraus.
The tube streams out/HER-out

さて (33c) でみたように、英語の pour in の場合は in の意味上の目的語が文脈から明らかになっていなければならないのであるから、この in はドイツ語

の *hinein* に相当すると考えられる。この想定が正しいのであれば、この *in* は機能範疇を含んでおり、そのために GP を許さないことになる。また、Zeller (2001) によれば *ein* ‘in’ などの不変化詞は(38)の統語構造を持ち、機能範疇を含まない。そのため格付与能力を持たず、不変化詞の意味上の目的語が(38)の構造に生じた場合、その名詞句は格が付与される位置に移動することになる。

- (38) PP
 |
 P⁰

結局、(32)にみられる英語とドイツ語の相違は、ドイツ語の不変化詞 *ein* ‘in’ が機能範疇を含まないのに対し、英語の *pour in* における不変化詞 *in* は機能範疇を含んでいるために GP を許さないと説明されることになる。⁴

次に、不変化詞 *ein* ‘in’ および *auf* ‘on’ を持つ動詞の GP には、なぜ(39)の制約が存在するのかという問題に戻ろう。

- (39) goal は 3 次元の実体である「容器」でなければならない。(=22)

この制約は、不変化詞 *ein* ‘in’ および *auf* ‘on’ が経路の最終地点をあらわす、すなわち出来事の有界性 (telicity) を持つことから必然的に生じるものであると思われる。⁵

- (40) a. Er hat in 10 Sekunden /??10 Sekunden lang das Glas eingegossen.
 He has in 10 seconds /10 seconds long the glass in-poured
 b. Er hat in 5 Minuten /??5 Minuten lang den Wagen aufgeladen.
 He has in 5 minutes /5 minutes long the car on-loaded

goal となる場所にある対象が漸増的に付加され、さらにその場所が出来事の最終地点となりうるためには、その漸増的对象が収まりうる「容器」でなければならないはずである。goal が 2 次元の実体である場合は、漸増的对象がいれば溢れ出てしまい、出来事の有界性を保証できないからである。

さらにこの点から、ドイツ語における他の不変化詞において GP が認められ

ない理由を検討しよう。McIntyre (2001a: 276f.) は、GP は ab 'off', aus 'out', ein 'in', auf 'on' において認められるが、⁶ 他の不変化詞 durch 'through', bei 'near/by', um 'around', unter 'under', zu 'to' では認められないと指摘している。⁷ 後者の不変化詞のうち、bei 'near/by' は、漸増の対象が段階的に移動する方向の意味を持ちえず、また、zu 'to' は漸増の対象が移動する方向の意味を持つが、漸増の対象が収まりうる「容器」を選択できず、したがって出来事の有界性を保証できない。また durch 'through', um 'around', unter 'under' の場合、goal が目的語となると義務的に他動詞となるため、GP は見られないことになる。⁸

- (41) a. Sie durchwebt den Stoff mit hübschen Mustern.
She through-weaves the material with pretty patterns
b. *Sie webt den Stoff mit hübschen Mustern durch.
- (42) a. Sie umlegten das Grab mit Blumen.
They around-laid the grave with flowers (Olsen 1996: 309)
b. *Sie legten das Grab mit Blumen um.
- (43) a. Er unterfliegt mit seiner Maschine das feindliche Radarsystem.
He under-flies with his plane the enemy radar-system
(Olsen 1996: 309)
b. *Er fliegt mit seiner Maschine das feindliche Radarsystem unter.

4.

本稿では、これまで(44)のような前置詞の意味上の目的語、すなわち Ground が不変化詞動詞の直接目的語として実現している現象を GP と呼んできた。GP、すなわち Ground Promotion という名称は、Ground が前置詞の目的語から動詞の目的語へと移動していることを示唆するが、Wechsler (2005) の結果構文に関する議論に依拠する Levin & Sells (to appear) は(44a)ではそのような移動は生じていないと考えている。

- (44) a. She wiped the table off. (= 24a)
 b. Sie goß das Glas ein.
 She poured the glass in

Wechsler (2005) は、目的語が動詞に選択されている「コントロール結果構文」と目的語が動詞に選択されていない「ECM 結果構文」を区別し、前者の場合に限り結果句が閉鎖スケールを持つ必要があると指摘している。これに対して後者の場合は、動詞があらわす行為と目的語の変化の間に同型性 (homomorphism) が存在する必要はなく、結果句は (45b, c) のような開放スケールを持つものでも構わないという。

- (45) a. Mary hammered the metal flat. (コントロール結果構文)
b. The dog barked itself hoarse. (ECM 結果構文)
c. I ate myself sick. (ECM 結果構文)

Levin & Sells (to appear) は (44a) を閉鎖スケールという観点から説明するのであるから、彼女たちは (44a) の目的語 the table は (45a) の the metal と同様に、動詞に選択されているとみなしている。しかし、すでにみたように、英語においても動詞に選択されない目的語が GP の目的語として生起することがある。

- (46) a. pour the bucket out *pour the bucket
b. pump the cellar out *pump the cellar
c. fish the lake out *fish the lake

また、英語の out および off にほぼ相当するドイツ語の aus や ab を持つ不変化詞動詞においても、その目的語は動詞に選択されているとは限らない。

- (47) a. den Eimer ausgießen *den Eimer gießen
the bucket out-pour the bucket pour
b. den See ausfischen *den See fischen
the lake out-fish the lake fish
c. den Keller auspumpen *den Keller pumpen
the cellar out-pump the cellar pump
d. den Laden auskaufen *den Laden kaufen
the shop out-buy the shop buy

- e. die Kiste auskramen *die Kiste kramen
 the box out-rummage the box rummage
- f. das Glas ausschlürfen *das Glas schlürfen
 the glass out-slurp the glass slurp
- g. eine Wunde ausschwemmen *eine Wunde schwemmen
 a wound out-wash a wound wash
- h. den Knochen/das Fleisch abknabbern
 the bone/the meat off-nibble
 *den Knochen/*das Fleisch knabbern
 the bone/the meat nibble (McIntyre 2001b: 142)
- i. den See abfischen *den See fischen
 the lake off-fish the lake fish
 (McIntyre 2001b: 142)

つまり、目的語が動詞に選択されているか否かという点と GP という現象の間には本質的な関連性はないとみなさなければならない。結局、GP を統一的に扱うためには、(48)のように動詞の目的語が脱落し、その上で前置詞の目的語が動詞の直接目的語に移動するという操作を想定しなければならないことになる。すなわち、これらの例においては実際に Ground が promote しているわけである。

(48) She wiped ~~the dust~~ off the table.



この分析においては、GP の契機は動詞の目的語の抑制ないし非実現にある。目的語の位置が空くことにより、そもそも格を付与できない不変化詞の意味上の目的語がその位置に移動することになる。

ここでの分析はノルウェー語のデータからも裏付けられるように思われる。ノルウェー語の不変化詞動詞においては、英語と同様、不変化詞は直接目的語の前後に生起できるが、不変化詞が直接目的語の後ろに生起した場合、その目的語は「主語」としての性質を帯びようになることが知られている。例えば(50b)にみるように、不変化詞が目的語の後ろに位置した場合、その目的語は不定詞句の意味上の主語となることができる。

- (49) Jon sparka {ut} hunden {ut}. (Norwegian: Åfarli 1985: 75)
 Jon kicked out dog-the out
- (50) a. *Vi jaget ut ulven for å gjenfinne sin tapte frihet.
 We chased out wolf-the to find again its lost freedom
 b. Vi jaget ulven ut for å gjenfinne sin tapte frihet.
 We chased wolf-the out to find again its lost freedom
 'We chased out the wolf in order for it to find its lost freedom again.'
 (Haiden 2006: 364)

さてノルウェー語において GP が生じた場合、不変化詞は目的語の後ろには生起できない。すなわち、(51) の *bordet* 'the table' は「主語」としての性質を持ってないわけである。Levin & Sells (to appear) は、英語の (52) のような GP が生じている文では、除去 (removing) という出来事ではなく、clear the table や empty the tub と同様にある場所の状態 (state of location) の変化について述べていると指摘するが、この分析では (52) の the counter や the cloth を「主語」と見なすことになってしまい、ノルウェー語の (51) は扱えないことになる。

- (51) Kellneren tørket {av} bordet {*av}. (Svenonius 1996)
 Waiter-the wiped off table-the off
- (52) a. She wiped the counter off.
 b. He rinsed the cloth out.

5.

本稿での議論は次のようにまとめられる。

- 1) ドイツ語の ein 'in' および auf 'on' を持つ不変化詞動詞にみられる GP においては、BE-S と同様、goal に移動する対象は漸増的性質を持つ。
- 2) 英語の pour in のような不変化詞動詞では GP が認められないのに対して、対応するドイツ語の不変化詞動詞 eingießen では GP がみられるのは、前者の不変化詞は後者の不変化詞と異なり、機能範疇を含むからである。
- 3) ドイツ語の ein 'in' および auf 'on' を持つ不変化詞動詞にみられる GP における goal は「3次元の容器」でなければならない。この制約は、漸増

の対象が移動する出来事を有界化する必要から生じる。

- 4) 英語のみならず、ドイツ語やノルウェー語も含めたデータを統一的に扱おうとする場合、実際に Ground が移動しているという分析が必要になる。

注

- 1 草稿に対して貴重なご指摘をくださった査読者に御礼申し上げる。また、本稿は平成19年度科学研究費補助金・基盤研究(C)「述語合成に関する記述的・理論的研究」、同基盤研究(B)「助動詞の体系が言語に及ぼす影響に関する理論的・実証的総合研究」、ならびに平成20年度科学研究費補助金・基盤研究(C)「状態再帰と与格受動」に基づく研究成果を含んでいる。
 - 2 ただし、(11g)でみた den Tee aufbrühen/aufgießen ‘the tea on-brew/on-pour’はこの制約の例外となる。また、この制約は ein ‘in’ ならびに auf ‘on’ を持つ不変化詞動詞の GP に限って妥当するものであり、ドイツ語の GP に関する一般的制約としては強すぎる。この点は次節で確認する。
 - 3 ちなみにドイツ語では、BE-S に不変化詞や結果句を付加することはできない。
 - (i) *Er behängt die Wand voll/an/auf.
He BE-hangs the wall full/on/on
 - 4 査読者から、ドイツ語の ein ‘in’ や auf ‘on’ を持つ不変化詞動詞にみられる GP を「編入」により扱う可能性を指摘していただいた。しかし、これらの不変化詞は文頭に生起可能であり、したがって統語的には「句」(phrase)を成していることになる。一般には主要部のみが「編入」可能なのであるから、これらの不変化詞動詞において不変化詞が編入されているとは考えにくい。
 - (i) Auf/Ein hat er den Wagen geladen.
On/In has he the car loaded
 - 5 ちなみに BE-S においては、通常、前置詞 mit ‘with’ により具現する漸増的対象が(iii)のように数量詞により限定されていない限り、非有界の出来事をあらわす。
 - (i) Er bespritzte die Passanten fünf Minuten lang/*in fünf Minuten.
He BE-splashed the passers five minutes long/in five minutes
 - (ii) Er bespritzte die Passanten fünf Minuten lang/*in fünf Minuten mit Wasser.
He BE-splashed the passers five minutes long/in five minutes with water
 - (iii) Er bespritzte die Passanten *fünf Minuten lang/in fünf Minuten mit einem Liter Wasser.
He BE-splashed the passers five minutes long/in five minutes with a liter water
(Rapp 1997: 522)
- BE-S と (40) の相違は、もちろん不変化詞の存在によってもたらされる。
- 6 ab ‘off’ が用いられている(i)における goal は「皿」であり、2次元的な実体

である。つまり、*ein* ‘in’ や *auf* ‘on’ の場合と異なり、不変化詞が *ab* ‘off’ の場合の GP には (39) で指摘した「goal は 3 次元の実体である『容器』でなければならない」という制約は存在しない。

- (i) *Er wischte den Teller ab.*

He wiped the plate off

- 7 McIntyre (2001a) は、さらに *an* ‘on’ と *los* ‘off’ についても GP は認められないと指摘している。Stiebels (1996: 105) は *an* ‘on’ が用いられている (i) では GP が生じていると指摘するが、Wurmbrand (1998) が主張するように、(i) の *grüne Farbe* ‘green color’ は対象が「降格」したものではなく、もともと付加詞であると考えられる。それは、(iib) のように、描かれる対象である「顔」は前置詞句に生起できないことから示される。

- (i) *Sie malt den Schrank mit grüner Farbe an.*

She paints the cupboard with green color on

- (ii) a. *weil Hans ein Gesicht an den Schrank malte.* (Wurmbrand 1998: 281)
because Hans a face to the cupboard painted

- b. **weil Hans den Schrank mit einem Gesicht anmalte.*
because Hans the cupboard with a face to-painted

(Wurmbrand 1998: 282)

また、*los* は *ab* ‘off’ と類似の意味を持つが、前置詞としての用法を持たないためここでの議論に関与しない。

- 8 ただし *über* ‘over’ については次の例がある。

- (i) *Ein Behälter läuft/flutet/quillt über.* (McIntyre 2001a: 277)

A container runs/floods/streams over

(i) は「容器から (液体が) 溢れる」という意味であるが、この場合の主語も 3 次元のものでなければならない。

- (ii) *Die Wanne/??Der Teller läuft über.*

The bathtub/the plate runs over

参考文献

- Åfarli, Tor A. (1985) Norwegian Verb Particle Constructions as Causative Constructions. In: *Nordic Journal of Linguistics* 8, 75–98.
- Brinkmann, Ursula (1997) *The Locative Alternation in German*. Amsterdam: Benjamins.
- Dowty, David R. (1991) Thematic Proto-Roles and Argument Selection. In: *Language* 67, 547–619.
- Haiden, Martin (2006) Verb-Particle Constructions. In: Martin Everaert & Henk van Riemsdijk (eds.) *The Blackwell Companion to Syntax*. Vol. 5. Malden, Mass.: Blackwell, 344–375.
- Levin, Beth & Peter Sells (to appear) Unpredicated Particles. In: Lian Hee Wee & Linda Uyechi (ed.) *Reality Exploration and Discovery: Pattern Interaction in Language and Life*. Stanford, CA.: CSLI Publications.

- [<http://www.stanford.edu/~bclevin/moh07.pdf>]
- McIntyre, Andrew (2001a) German Double Particles as Preverbs. Tübingen: Stauffenburg.
- McIntyre, Andrew (2001b) Argument Blockages Induced by Verb Particles in English and German: Event Modification and Secondary Predication. In: Nicole Dehé & Anja Wanner (eds.) *Structural Aspects of Semantically Complex Verbs*. Frankfurt am Main: Lang, 131–164.
- McIntyre, Andrew (2003) Preverbs, Argument Linking and Verb Semantics: Germanic Prefixes and Particles. In: Geert Booij & Jaap van Marle (eds.) *Yearbook of Morphology 2003*. Dordrecht: Kluwer, 119–144.
- McIntyre, Andrew (2007) Particle Verbs and Argument Structure. In: *Language and Linguistic Compass* 1, 350–367.
- Olsen, Susan (1996) Pleonastische Direktionale. In: Gisela Harras & Manfred Bierwisch (eds.) *Wenn die Semantik arbeitet*. Tübingen: Niemeyer, 302–329.
- Rapp, Irene (1997) Fakultativität von Verbargumenten als Reflex der semantischen Struktur. In: *Linguistische Berichte* 172, 490–529.
- Stiebels, Barbara (1996) *Lexikalische Argumente und Adjunkte*. Berlin: Akademie Verlag.
- Svenonius, Peter (1996) The Verb-Particle Alternation in the Scandinavian Languages. Ms. [<http://ling.auf.net/lingBuzz/000046>]
- van Riemsdijk, Henk (1990) Functional Prepositions. In: Harm Pinkster & Inge Genée (eds.) *Unity in Diversity: Papers Presented to Simon C. Dik on His 50th Birthday*. Dordrecht: Foris, 229–241.
- Wechsler, Stephen (2005) Resultatives under the ‘Event-Argument Homomorphism’ Model of Telicity. In: Nomi Erteschik-Shir & Tova Rapoport (eds.) *The Syntax of Aspect*. Oxford: Oxford University Press, 255–273.
- Wurmbrand, Susi (1998) Heads or Phrases? Particles in Particular. In: Wolfgang Kehrein & Richard Wiese (eds.) *Phonology and Morphology of the Germanic Languages*. Tübingen: Niemeyer, 267–295.
- Zeller, Jochen (2001) *Particle Verbs and Local Domains*. Amsterdam: Benjamins.